



# 「門松」Q&A



自然体験塾

2019年12月15日

【「門松」を作ってお正月】テキスト

## Q. 「門松」ってなあに？

A. 1年の始まりは、お正月(元旦)です。

新しい年を迎えるために、玄関先を清め、悪い鬼や邪気などが家の中に入ってこないように、家の門口などに「門松」を飾る風習が古くから全国的に伝えられています。

「門松」は、その年の神様(歳神)をお招きするための目印であり、お降りになった神様が宿として使われる場所(依代:よりしろ)となります。

元々は、松・杉・椎(しい)・榊(さかき)といった常緑樹(年中緑で枯れ落ちない:永遠の繁栄の願いを込めて)が使われましたが、いつしか主として松(手に入れやすい)だけが使われるようになりました。

これを門に立てるので「門松」と呼ばれています。「松は千歳を契り、竹は万代を契る」ということわざもあり、松と竹が門松に使われ、神様の安息所(依代)が永遠に続くことを願っての組み合わせと考えられています。

## Q. 「門松」の歴史は？

A. その由来は、中国の唐王朝(約1400年~1100年前)までさかのぼります。

日本に「門松」の風習が入ってきたのは平安時代(約1200年~800年前)で、始まりは当時の貴族が年中行事としてこれを使った(どんな形でどんな時に使ったのかは不明)といわれています。

そして室町時代(約600年~400年前)には、おおぜいの人々にこの風習が知られるようになりました。

門松に斜め切りの竹を使う、今日のような形になったのは、安土桃山時代(約400年前)、徳川家康が始まりとされています。のちに江戸幕府を開いた徳川家康は、若い頃、生涯で一度だけ、三方ヶ原(静岡県)の合戦で武田信玄(甲斐の国・山梨県の武将)に敗れたことがありました。家康は命からがら浜松城に逃げ帰り、その後「二度と武田信玄には負けないぞ!」との意気込みで、自分の刀で竹(武田)をスパッ!と斜めに切り、それを立てて、自分へのいましめ(はげみ)としたそうです。やがて、その意気込みを知った家臣や武家にこれが広まって習慣となり、次第に一般家庭にまで広まっていきました。



今日のように、正月に「門松」が使われるようになった(大衆化した)のは、意外と遅く、江戸時代から明治時代(約150年前)に入った頃といわれています。



## Q. 現代の「門松」は？

A. 今、私たちが目にする「門松」は、竹3本を縄で下から3か所(7巻き・5巻き・3巻き)しばり、松枝で囲んで、荒縄で結んだ形が基本です。これに《えんぎもの》の梅や笹、ナンテン(難を転じる)、ハボタン、ウラジロなどで飾ったものが一般的で、左右一対で門口や玄関先に飾られます。



関西方面では、質素な型として、松の小枝に半紙を巻き、水引(金銀糸や紅白糸)で結わえたり、シデやダイダイ、ヒラギなどで飾られたものもあります。

全国的には、「門松」はお正月の祝い物・飾り物としてその形や大きさ、姿も様々なものがあるようです。



## Q. いつ「門松」を飾るの？

A. 年末 12 月 26 日から 30 日までの間(28 日まで)に立てることが一般的です。

ただし、立てるのを避ける日があります。それは 29 日と 31 日です。

29 日: 「九松」→「苦待つ」・「苦松」・「苦立て」として嫌われますが、逆にこれを、「二九松」→「福待つ」と呼んで歓迎する場合もあります。

31 日: 「一夜飾り」といって、正月の神様をお迎えするのに、一日だけでは誠意が足りない、という意味から避けます。

## Q. いつまで「門松」を飾っておくの？

A. 神様をお招きする役目を終えた「門松」や「しめかざり」は、《七草》の七日に取り外し、神社などに持って行って燃やす地方が多く、正月を一区切りする意味で、元旦から 1 月 7 日までを「松の内(まつのうち)」といいます。これも、地方によっては、6 日とか 15 日とかいろいろあるようです。

ちなみに、取り外された「門松」や「しめかざり」さらに「書きぞめ」などを田んぼや河原に持っていき、長い笹竹をたばねて立てた太い柱のまわりに置いて火をつけ、燃える柱のたおれた方角でその年の米の豊作を占い、その灰で焼いた餅を食べてカゼや病気などの厄払いを願う行事を、各務原では「左義長(さぎちょう)」、一般的には「どんど焼き」と呼んでいます。

## つけたし

もし、あなたが「門松」を買おうとする場合、それは《えんぎもの》ですから、値切って買うのはあまり良くないとされています。念のため！

